「完璧」を捨て、失敗を学びにいった 14 日間

古内結子/Yuko Furuuchi

はじめに

どこにでもいるような高校 1 年生の私が 2 週間のオーストラリア留学という貴重な経験ができたのは、埼玉県国際課の方々及び関係者の皆様、そして家族の支えがあったからです。この場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、私たち埼玉親善大使はクイーンズランド州にある Yeronga State High School へお邪魔しました。このレポートでは、長いようで短かったオーストラリアでの生活や現地の人たちとの素晴らしい思い出を私なりにまとめたのでぜひ最後までお楽しみください。

高校について

留学中、私たちは Yeronga State High School (YSHS)という公立高校に通いました。私のホームステイ先の家から高校までは車で 10 分、徒歩だと 30 分という距離にあり学校がある日はホストマザーかファザーが送り迎えしてくれました。学校はとても広く、カラフルでかわいかったので日本のシンプルな高校とのギャップに驚きを隠せませんでした。また、生徒一人ひとりの「自由」と「自分らしさ」がとても尊重されていると感じました。制服にはたくさんのバリエーションがあり、自分に合ったものを選べたり髪型を自分なりにアレンジしたりしていて素敵だと思いました。

一番印象的だったことは、生徒が主体的に授業を受けていたということです。その主な理由は生徒自身が受けたい授業を選ぶシステムだからだと思いました。また、日本では自分の意見を積極的に発表する生徒は少ないイメージです。しかし、オーストラリアでは自分の意見を何がなんでも言いたい！先生当ててくれ！と言っている生徒が多かったです。このすごく賑やかで、自分の意見をはっきりと言えることは当たり前にみえて、実は私たちができていないことなのではないかと感じました。自分の考え、意見を持つこと。そしてアウトプットすることの大切さを学びました。失敗を恐れず、挑戦する YSHS の生徒の皆さんみたいになりたいと強く思いました。





ホストファミリーとの生活

私のホストファミリーは、6 人家族でした。両親、姉妹そして大型犬の兄弟（ブレイジー・マーフィー）です。姉とは同じ高校に通い、妹は別の学校に通っていました。姉のホストシスターは予定がたくさんあり、会える機会が多くはありませんでしたが夕食などで話すことができました。妹のホストシスターは、本当に優しく私と年齢差はありましたが本物の姉妹のように一緒に散歩に行ったり、歌ったり、踊ったり、映画を見たり、ふざけあったりして毎日過ごしました。私がもっと英語を喋れるようになりたいと伝えると、彼女は私の英語の先生になってくれました。そのため、私はわからないことは全て質問し、たくさんの単語や表現を覚えることができました。夜には一緒にドライブへ出かけ、アイスを食べたのも良い思い出です。また、ホストマザーそしてファザーは毎日学校までの送迎、朝食・夕食の準備その他たくさんのことをしてくれました。本当に感謝してもしきれません。特に私はホストマザーが作ってくれるグレープフルーツジュース、ホストファザーが作ってくれるホットココアが大好きです。日本の話やオーストラリアの話、そして家族の話をたくさんすることができました。私がお世話になったホストファミリーはとても温かく、本物の家族、娘として迎え入れてくれました。1 番、最高で大好きな家族です。次に会う時にはより自分の思いを自分の言葉で伝えられるように英語勉強に努めます。ホストファミリーと過ごす中で、自然と穏やかな気持ちでリラックスすることができました。日本での忙しい生活とは違い、自分の時間を大切にすること、穏やかな 1 日を過ごすことの大切さを改めて感じることができました。











親善大使としての活動

・インスタグラムの投稿
・埼玉県についてクイズ形式で紹介
・ワークショップ
（「旅立ちの日に」合唱、折り紙、書道）



バディーには、毎日小さなお菓子を渡していました。特に人気だったのは、ピュレグミ、コアラのマーチ、ハッピーターン、アポロでした。みんな日本についてとても興味があり日本語を勉強している生徒も多かったので日本の話やお菓子をあげるとすごく喜んでいました。また、日本の文房具に興味がある生徒が多かったイメージがあります。
ホストファミリーへのお土産は、お箸、お菓子をたくさん持っていきました。抹茶のキットカット、こつぶつこという煎餅のお菓子が人気でとてもおいしいと言っていました。カップラーメンもすごく喜んでいました。

さいごに

たくさんの愛情を感じ、そしてたくさんの感謝を伝えた 2 週間。最終日、Yeronga State High School のみんなから思い出ムービーをいただき、そこには長いはずの 2 週間が数分に収まっていましたがムービーを見ただけで鮮明に色々な記憶が蘇ってきました。私がこの留学を通して唯一誇れることは、何を言っているかわからなくても、話の速さについていけなくても、現地の高校生の輪の中にいたということです。また、奨学生同士で話すときも英語で話すことを意識していました。しかし、私は常に誰かの力を借りていました。毎日ご飯を作ってくれたホストファミリー、大好きなバディーの 6 人、現地校の先生方、一緒に留学に挑戦した仲間には感謝しかないです。これからも、自分の限界を決めずに努力していきます。そして世界と日本の懸け橋に必ずなります。
改めて、この企画に携わっている方々本当にありがとうございました。



